

## 佐佐木頼綱

（平成三十一年二月号）

声がなくとも伝へたき事のやう朝の陽に透く玲瓏の翅

賑やかに刺繍がされた服を着るうれしさを我が心音とする

表情は音を放つと吾は思ふ。例へば海を見る君の眉

音のない言葉のやうにゆつくりと濃紺色になる海の色

聴こえたら色とりどりに我が心奪ふのだらう葉を揺らす風

あたたかな陽の熱ふくむ風のたび君の声かと思ひ振り向く

声だつた風だと思ふ喪失を経ながら至るやはらかさがある

障害者のイベントに参加し音の聞こえない世界を疑似体験して作りました。  
年間選者賞をもらったことを義祖父に報告しようと思います。

### ●選者の言葉

二回特選に推した佐佐木頼綱氏の作のうち二月号の七首を年間選者賞とした。いま頼綱氏の作品は多彩な展開を見せている。

「声」「音」をテーマにした連作である。といっても、この作品七首はすべて無音の世界である。無音の世界に「声」「音」を聴いている。

- ・ 声がなくとも伝へたき事のやう朝の陽に透く玲瓏の翅
- ・ 表情は音を放つと吾は思ふ。例へば海を見る君の眉
- ・ 聴こえたら色とりどりに我が心奪ふのだらう葉を揺らす風

本当の「音」や「言葉」を聴くためには無音が大事だというパラドックスは深い意味合いを今日の世界に持っている。



### ●作者の言葉

この度は伊藤一彦先生の年間選者賞をいただき、ありがとうございます。

耳が遠い九十八歳の義祖父

と住んでいた頃に詠んだ歌で

す。娘や孫の声を聞きたいと補聴器をいじってばかりいた義祖父の苦しみを理解したく一緒に歌を作ったり、聴覚